

# 近代日本の日記文化と自己表象—旧制第二 高等学校『忠愛寮日誌』を中心に—

田中 祐介

キーワード：日記、書記文化、読書文化、史料論

歴史の中で、有名無名の無数の人々が日記を綴ってきた。人はなぜ日記を、特に自己について書き綴るのか。秘匿すべきものでありながら、どこかに読者の眼差しを意識して自己の煩悶や思索を綴る行為の意味とは何か。自発的に綴る日記もあれば、義務づけられ、点検者の逆鱗に触れる日記もある。最も日常的な書記行為としての日記とそれをめぐる文化現象の考察を通じて、近代日本の「書く歴史」を見つめ直したい。今回の報告では、報告者が取り組む科学研究費助成事業の概要を紹介するとともに、旧制第二高等学校のキリスト教主義学生寮である忠愛寮の寮日誌を分析する。

## 科学研究費助成事業の概要

2008年から2010年にかけて、報告者の恩師である故福田秀一氏（国文学研究資料館名誉教授、国際基督教大学元教授）が遺された5,000点を超える日記関連資料の目録化の責任役を務めた。資料の中には計492冊の日記帳の現物（多くが実際使用されたもの）が含まれており、これについては日記帳の種類、日記の記入期間、記入者の社会的属性、内容に関する特記事項を追記した目録を作成し、「近代日本の日記帳」と題して、2013年3月に公にした<sup>1</sup>。この成果を踏まえ、従来の研究上の関心である近代日本の教養主義にも接続できるよう、特に青年知識層の自己形成に焦点を定めて立案し、採択されたのが、「未活字化の日記資料群からみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究」（若手研究 B、2014-2016 年度）の事業である。

事業の大目的として三本の柱を立てた。第一に、手書きの日記資料の目録化を進め、「ならべ読み」の環境を整備すること、第二に、手書きを含む日記資料群から特に青年男女が綴った「内面の日記」を選定、集中的に読解し、「国民教育装置」としての側面をもつ日記における自己形成の実態を分析すること、第三に、上記の個別研究を文学および隣接分野の研究成果に接合し、近代日本の青年知識層における自己形成を複眼的に考察する視座を獲得することである。

## 日記資料の目録化とその意義—「つづけ読み」から「ならべ読み」へ

上掲した大目的の第一点目の取り組みとして、千葉県八千代市を活動拠点とする「女性の日記から学ぶ会」収蔵の日記帳（約2,000-3,000冊）の目録化事業に取り組んでいる。これは、会の代表である女性史家の島利栄子氏との連携のもと、日記資料の将来の保管活用を見据え、基礎的なデータベースを作成する事業である。従来、個人の日記を通時的に読む「つづけ読み」は、著名人の日記のみならず、市井の人々の日記においても為されてきた。しかし、同時期に綴られた複数の日記を

<sup>1</sup> 田中祐介・土屋宗一・阿曾歩「近代日本の日記帳—故福田秀一氏蒐集の日記資料コレクションより—」『アジア文化研究』第39号、2013。

読み解く「ならべ読み」は、戦時下の日記を中心に成果が皆無ではないものの、基礎的なデータベースの未整備により、本格的な取り組みは為されていないのが現状である。今回の事業は同会の日記資料の目録化を通じて、将来にわたる資料の保管活用を見据えた基礎的情報の把握とともに、「ならべ読み」を可能とする環境の整備を狙いとする。ただし、日記資料は個人の記録であることから、個人情報保護の観点から安易な一般公開はできないことも勿論である。同会との協力関係のもと、具体的な活用方法は慎重に考える必要がある。

### 「近代日本の日記文化と自己表象」研究会

大目的のうち、第二点目と第三点目に取り組むべく、2014年9月より「近代日本の日記文化と自己表象」と題した研究会を開催している。日記における自己の綴り方、あるいは綴らされ方を検討課題の中核に据えつつ、近代日本の書記文化と読書文化を学際的に考察する研究会である。幸いな事に、研究会は多様な参加者に恵まれた。関東近辺の諸大学にとどまらず、東北大学、奈良女子大学、京都大学、愛知学院大学、名古屋大学、同志社大学の教員と大学院生の参加も得られ、毎回約20名前後が集まるにぎやかな会となった。参加者の学問領域も、文学、教育学、歴史学、思想史学、社会学、文化人類学と様々である。現在（2015年1月）時点で計7回開催し、今後も二ヶ月の一度のペースで続けてゆく（本稿末尾に開催記録を掲載する）。事業の最終年度である2016年度には、研究会の成果としてシンポジウムの開催と、論文集の刊行を計画している。

### 〈多声響く内面の日記〉としての『忠愛寮日誌』

今回の報告では、研究会「近代日本の日記文化と自己表象」で取り上げた日記資料から、旧制第二高等学校の寄宿舎として設置された忠愛寮の日誌を紹介した。第二高等学校には、最大規模の明善寮を筆頭に、様々な寮が設置された。この中で忠愛寮は、「基督教徒及其主義を賛成する者」を入寮条件として、1895年に成立したキリスト教主義の寮である。戦時期は閉寮の圧力も蒙ったが、戦後、旧制高等学校が廃止される前年の1949年まで存続した。

忠愛寮の日誌（以下、「忠愛寮日誌」）が、大正期から昭和戦後期まで、確認できる限り17年分にわたって残されている。日誌には毎朝の礼拝の記録が記されるとともに、自己の煩悶や思索が率直に綴られる。のみならず、日誌の内容に他の寮生が異議を書き込み、紙面は論争の舞台の様相を呈することもあった。

一般的に言って、個人が綴る内面の日記は秘匿性が高く、複数人が綴る出来事の日誌は公共性が高い。これに対して忠愛寮日誌は、多くの寮生が交替で綴り、身近な読者を想定すべき公共性が自明でありながら、同時に個々の書き手が真摯に自己の内面を告白し、他者が応答する場である点で極めて興味深い。いわば忠愛寮日誌は〈多声響く内面の日記〉に他ならない。

報告では、礼拝の簡潔な記録として始まった寮日誌が、時を経るにつれ、書き手の煩悶や思索を

書き綴る場となったことを指摘した。更に太平洋戦争期の日誌を中心に、紙面上で展開された寮生同士の論争の内実を紹介ながら、戦時下における「真面目」と「不真面目」の天秤において、共感、批判、あるいは憤懣の力学がどう作動するかを検証した。

### 参考：「近代日本の日記文化と自己表象」研究会の活動記録

第1回（2014年9月20日）

「手書きの日記史料群は研究をいかに補い、掘り下げ、相対化するか—国際基督教大学アジア文化研究所蔵『近代日本の日記帳コレクション』を中心に—」（田中祐介、国文学研究資料館機関研究員）

第2回（2014年12月9日）

「「学徒兵の読書」の相対化にむけて—日記を使用した研究の一例として—」（中野綾子、早稲田大学大学院）

「〈学生〉たちの記録行為—戦後学生運動の現場から—」（道家真平、東京大学大学院）

第3回（2015年3月7日）

「個人の財産を社会の遺産に—「女性の日記から学ぶ会」の活動を通して—」（島利栄子、「女性の日記から学ぶ会」代表）

「農民日記をつづるといふこと—近代農村における日記行為の表象をめぐって—」（河内聡子、宮城学院女子大学非常勤講師）

第4回（2015年5月9日） 特集「近代日本のマス・リテラシー」

「教材としての日記：高等小中学校生徒の日記を手掛かりとして」（柿本真代、仁愛大学専任講師）  
「日常の実践としての「書くこと」：雑誌メディアにおける投稿記事を事例に」（大岡響子、東京大学大学院博士課程・国際基督教大学アジア文化研究所準研究員）

「多声響く〈内面の日記〉：戦時下の第二高等学校『忠愛寮日誌』にみるキリスト教主義学生の心情・信仰・炎上の論争」（田中祐介、明治学院大学助教）

「読書環境の拡大：戦場への書物流通と読み書きの実践」（中野綾子、日本学術振興会特別研究員PD・早稲田大学非常勤講師）

第5回（2015年7月19日） 特集：〈女学生〉の書記文化を再考する

「少年少女雑誌にみる作文と文体」（嵯峨景子、明治学院大学非常勤講師・国際日本文化研究センター共同研究員）

「奈良女子高等師範学校で「書く」こと 一大正大礼記念行事を例に一」（磯部敦、奈良女子大学准教授）

「多様な「女学生」の読み書きの実践を探る 一白河高等補習女学校生徒の日記帳と佐野高等実践女学校の校友会雑誌から一」（徳山倫子、京都大学大学院）

第6回（2015年9月19日）

「近代作家たちによる戦時下の王朝日記受容」（川勝麻里、明海大学ほか非常勤講師）

「歴史史料としての病床日誌——陸軍病院における事例を中心に」（中村江里、関東学院大学ほか非常勤講師）

第7回（2015年12月6日）

「銃後日記から「国民意識」をみるということ」（梅藤夕美子、京都大学大学院）

特別講演：「『五十嵐日記』を語る 戦後復興期の古書店文化と青春の日々」（五十嵐智、五十嵐書店店主）